山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第69集

ZENKOUJI　KITA　SITE

善光寺北遺跡

1992.3

山梨県教育委員会

山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第69集

ZENKOUJI　KITA　SITE

善光寺北遺跡

1992.3

山梨県教育委員会

序

本報告書は、県道甲府敷島線建設工事に先立って発掘調査された山梨県甲府市善光寺3丁目地内に所在する善光寺北遺跡について、その成果をまとめたものであります。

遺跡の所在する北原扇状地には、古墳時代後期の群集墳の存在することで古くから知られ、扇状地扇央部には甲斐の名刹として名高い善光寺や東光寺が存在する地域であります。

本遺跡は、この善光寺の北側の地域にあたることから善光寺北遺跡と呼ばれており、調査の結果、縄文時代中期の住居址1軒、土坑1基の他、土器や石器などの遺物が多く発見されました。遺構の大部分は、後世の河川の氾濫で削平されておりましたが、炉や土坑内土器の存在によって該期の集落の一部を明らかにすることができました。

本報告書が、縄文時代研究の一資料として多くの方々にご利用いただければ幸甚です。末筆ながら、種々ご協力を賜わりました関係機関各位、地元の方々並びに直接調査、整理にあたられた方々に厚く御礼申し上げます。

1992年3月

山梨県埋蔵文化財センター
所長　磯　貝　正　義

例　　言

1. 本書は、山梨県甲府市善光寺３丁目36番地他に所在する善光寺北遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、県道甲府敷島線建設工事に伴う事前調査であり、山梨県教育委員会が県土木部の依頼を受けて実施した。
3. 発掘調査は、山梨県教育委員会文化課が行ない、同課小林広和、中山誠二が担当した。出土品の整理及び報告書の執筆、作成は山梨県埋蔵文化財センターが継承し、同機関中山が行った。
4. 写真撮影は中山が行った。
5. 報告書にかかわる出土品及び記録図面、写真などは一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

凡　　例

1. 本書の挿図の縮尺は原則として次のとおりである。

遺構　　遺構図　１／20

遺物　　縄文土器実測図１／６、縄文土器拓影図１／３、土偶・石鏃１／２、打製石斧・磨石１／３、中近世の遺物１／３

目　　次

序
例言
凡例
第Ⅰ章　調査状況 …… 1
　第1節　発掘事務経過 …… 1
　第2節　調査の実施 …… 1
第Ⅱ章　遺跡概況 …… 2
　第1節　遺跡の立地と地理的環境 …… 2
　第2節　遺跡周辺の歴史的環境 …… 2
第Ⅲ章　遺構と遺物 …… 7

挿図目次

第1図　遺跡位置図
第2図　遺跡全体図
第3図　遺物平面分布図
第4図　1号住居址炉址
第5図　1号土坑
第6図　1号土坑・1号住居址出土土器
第7図　縄文土器①
第8図　縄文土器②
第9図　縄文土器③
第10図　縄文土器④
第11図　縄文土器⑤
第12図　土偶・石鏃
第13図　打製石斧・磨石
第14図　陶磁器・土師質土器・擂鉢

図版目次

図版1　1号住居址出土土器・1号土坑出土土器
図版2　縄文土器
図版3　縄文土器・縄文時代石器
図版4　土偶・中近世の遺物

第Ⅰ章　調査状況

第1節　発掘事務経過

1. 調査にいたる経過

国道140号（通称『甲府北バイパス』）は、東山梨地域から甲府市への通勤時の渋滞緩和策として敷設された甲府市北部の愛宕山トンネルに通じる新設路線である。昭和55年県土木部より甲府北バイパスの事業計画が県教育委員会に提出された。バイパスのルートは八人山山麓部から愛宕山トンネルにいたる地域で、大円川と高倉川の扇状地を通過する。この地域には既に善光寺北遺跡が周知されていたため、県教育委員会文化課によって発掘調査が行われることとなった。以後、書類手続きは下記のとおりである。

昭和55年11月７日　文化庁に発掘通知を提出する。
昭和55年11月20日　発掘調査を開始する。
昭和55年12月28日　発掘調査を終了する。
昭和56年１月17日　甲府警察署へ発見通知を提出する。

2. 調査組織

調査主体　山梨県教育委員会
調査機関　山梨県教育委員会文化課
調査担当者　文化財主事・小林広和
　　文化財主事・中山誠二
整理作業員　長田久美子、長田久江、平真寿美、野中はるみ、平重蔵

第2節　調査の実施

1. 発掘区の設定と調査方法

発掘調査区は、東西60ｍ、南北16ｍにわたり、調査区内に４ｍグリッドを設定し、全面発掘を行った。調査区南西側は、現在の居住域のため調査が不可能であった地点である。

遺構及び遺物の分布は調査区東側に集中しているが、他方、遺跡西側では遺物の散布がほとんど無く、遺構も検出されていない。

第 II 章　遺 跡 概 況

第 1 節　遺跡の立地と地理的環境

善光寺北遺跡は、甲府市善光寺 3 丁目36番地他に所在する。

遺跡の所在する甲府市は甲府盆地の中央部よりやや北寄りに位置し、南北32km、東西 8 kmの矩形の市域をなす。北部は標高 2,695 mの金峰山から国師ケ岳の稜線を分水嶺として長野県南佐久郡川上村に接し、東は東山梨郡牧丘町・山梨市・春日居町、東南から南にかけては東八代郡石和町・中道町・豊富村、南西は中巨摩郡玉穂町・昭和町、西は中巨摩郡竜王町・敷島町・北巨摩郡須玉町に接する。

遺跡の所在する地区は里垣地区と呼ばれ、東側を板垣山、北及び西側を大笠山・愛宕山等の山々に囲まれ、そのほぼ中央を流下する高倉川によって形成された小扇状地を中心とする地域である。北原扇状地と呼ばれるこの地域では、古くから古墳時代後期の群集墳が知られている他、中世以来の名刹善光寺、東光寺などが所在し、甲斐全体の中でも歴史的に重要な地域である。

第 2 節　遺跡周辺の歴史的環境

1986年に刊行された『甲府市の遺跡～甲府市内遺跡詳細分布調査報告書～』によれば、この地域には53遺跡の分布が知られている。これまでの発掘調査では、善光寺北遺跡や北原遺跡などで縄文時代中期の遺物や遺構が知られることから、北原扇状地扇央部付近において該期の遺跡が展開するものと考えられる。しかし、この地区の遺跡の全体からすると縄文時代の遺跡は少なく、古墳時代後期以降に開発が進んだ状況が推定されている。

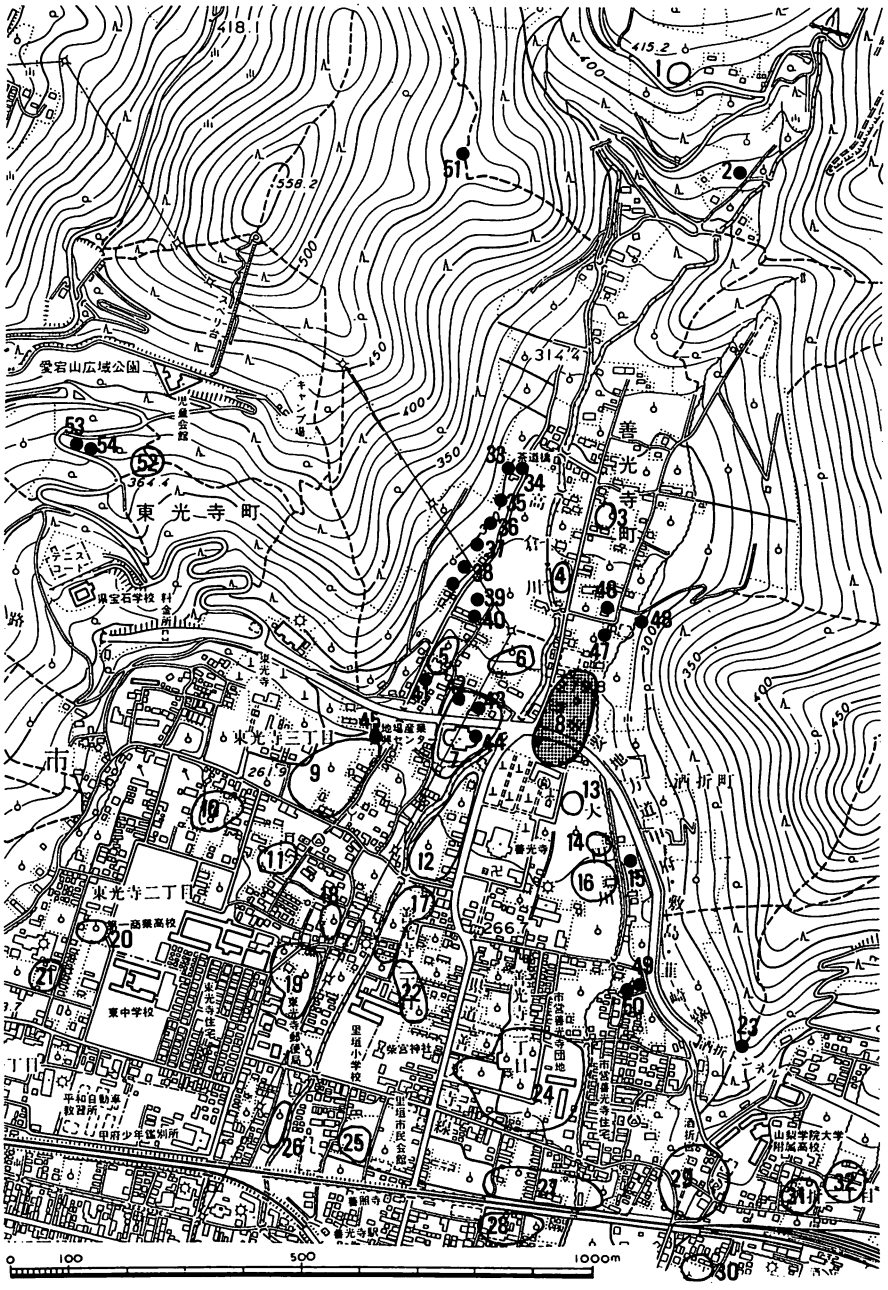
古墳時代前期の遺跡としては本郷遺跡などが存在する。後期では北原古墳群の状況からかなりの遺跡数が予測されているが、集落址そのものの発掘調査例は少ない。北原古墳群は、扇状地扇頂部およびその縁辺部に位置し、扇央部から扇端部に展開する集落址と立地に大きな差が認められる。古墳の多くはほとんどが開墾等によって削平されているが、20基前後の古墳の存在が分布調査においても明らかにされている。

この内、稲荷塚 1 号墳（40）は盛り土が削平されているものの、直径13mを測る円墳で、長さ 6.1 m、幅 1.56 m、高さ 0.98 mを測る横穴式石室を有することが知られている。地蔵塚古墳は、現状では直径 11.6 m、高さ 1.5 mを測る円墳である。石室形態は不明であるが、墳丘の一部に石室の用材と思われる石が露呈しており、横穴式石室の可能性がある。墳丘には耕作によって出土したと思われる須恵器片が散布している。ポンポコ塚古墳は直径約18mの円墳で、墳頂には横穴式石室の天井石と思われる石が一部露呈している。不老園古墳（23）の墳丘は削平され、石室のみが残存している。石室は横穴式石室で全長 5.7 m、幅 1.4 m、高さ 0.8 mを測る。

その他、痕跡のみを残すものや既に削平されて確認できないものを勘案すると、相当規模の後期古墳群を想定でき、この北原扇状地を中心とした勢力の存在を窺うことができる。

平安時代の遺物は扇状地にほぼ万遍なく散布しており、該期の集落が広範囲に展開したと推定されている。

また、中世以後の遺物も多く、特に善光寺南方の地域には分布が濃厚となる。殿屋敷の字名や板垣氏の伝承なども総合してこの付近には中世の豪族屋敷や集落址の存在が予測されている。



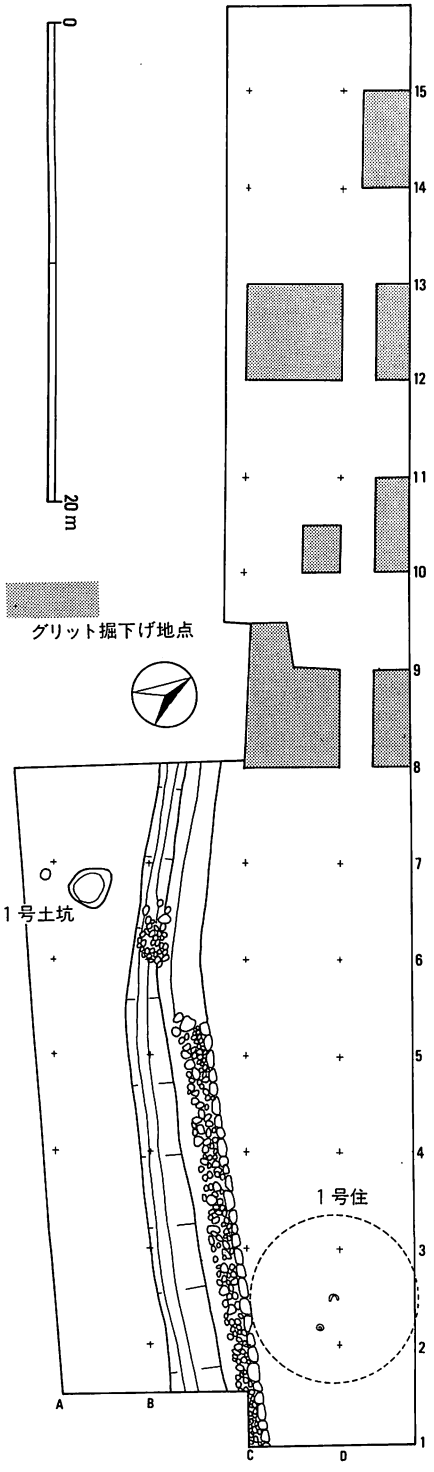
第 1 図　周辺遺跡分布図

周辺遺跡一覧表

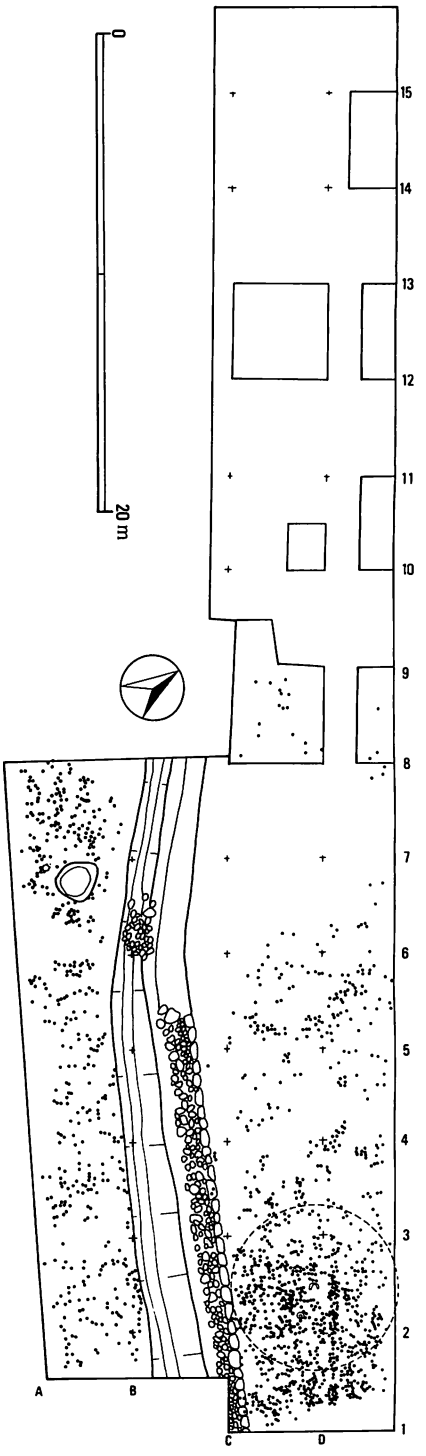
番号	遺跡名	所在地	時代	備考
1	茶堂遺跡	善光寺町3000他	平安～	
2	無名墳	善光寺町3162	古墳？	
3	北善光寺Ｂ遺跡	善光寺町2858－15	古墳～	
4	北善光寺Ａ遺跡	善光寺町3038－3	平安～	
5	堤下Ｂ遺跡	東光寺町1424他	平安～	
6	堤下Ａ遺跡	東光寺町1490	平安～	
7	北原遺跡	東光寺町北原1313他	縄文・平安	
8	善光寺北遺跡	善光寺町2770他	縄文・平安	
9	地蔵北遺跡	東光寺3丁目	古墳～平安	
10	亥ノ兎遺跡	東光寺3丁目	平安～近世	
11	大六天遺跡	東光寺2丁目	平安～近世	
12	宮ノ脇Ａ遺跡	東光寺2丁目	縄文・平安～近世	
13	南善光寺Ｂ遺跡	善光寺2丁目	古墳～平安	
14	南善光寺Ａ遺跡	善光寺3丁目35他	平安～	
15	無名墳	善光寺3丁目34	古墳？	
16	殿屋敷遺跡	善光寺3丁目33	平安～近世	
17	宮ノ脇Ｂ遺跡	善光寺2丁目	縄文・平安	
18	宮裏遺跡	東光寺2丁目	平安～	
19	銀杏之木遺跡	東光寺2丁目	平安～近世	
20	六反田遺跡	東光寺2丁目	平安～近世	
21	御崎田遺跡	東光寺2丁目	平安～	
22	上郷遺跡	善光寺2丁目	平安～近世	
23	不老園古墳	不老園内	古墳	
24	本郷遺跡	善光寺3丁目	古墳～近世	
25	宮ノ前遺跡	善光寺2丁目	縄文	
26	東光寺遺跡	東光寺1丁目	平安～近世	
27	本郷Ｂ遺跡	善光寺3丁目	平安～近世	
28	本郷Ｃ遺跡	善光寺1丁目	古墳～中世	

番号	遺　跡　名	所　在　地	時　代	備　考
29	酒折縄文遺跡	酒折３丁目	縄文	
30	内林遺跡	酒折１丁目	近世	
31	酒依氏館跡	酒折町字屋敷ノ丁	中世	
32	酒折遺跡	酒折３丁目８	近世	
33	善光寺塚２号墳	善光寺町	古墳	
34	善光寺塚１号墳	善光寺町	古墳	
35	無名墳	善光寺町	古墳	
36	無名墳	善光寺町	古墳	
37	無名墳	善光寺町	古墳	
38	無名墳	善光寺町	古墳	
39	稲荷塚２号墳	善光寺町1522	古墳	円墳
40	稲荷塚１号墳	善光寺町1522	古墳	円墳
41	北原無名１号墳	善光寺町	古墳	
42	無名墳	善光寺町	古墳	
43	無名墳	善光寺町	古墳	
44	北原無名２号墳	東光寺３丁目	古墳	消滅
45	法印塚古墳	善光寺町	古墳	
46	三日月塚古墳	善光寺町2855	古墳	
47	地蔵塚古墳	善光寺町	古墳	
48	鎧塚古墳	善光寺町3307	古墳	
49	ポンポコ塚	善光寺町2420	古墳	石室残存
50	おめ塚古墳	東光寺町	古墳	墳形消滅
51	一つ塚古墳	東光寺山山腹	古墳	
52	大笠山水の元遺跡	東光寺町	古墳～	
53	大笠山１号墳	東光寺町	古墳	半壊
54	大笠山２号墳	東光寺町	古墳	半壊
55	無名墳	善光寺町	古墳	

（『甲府市の遺跡』1986.『甲府市史』資料編第１巻　1989より作成）



第 2 図　遺跡全体図



第 3 図　遺物平面分布図

第 Ⅲ 章　遺構と遺物

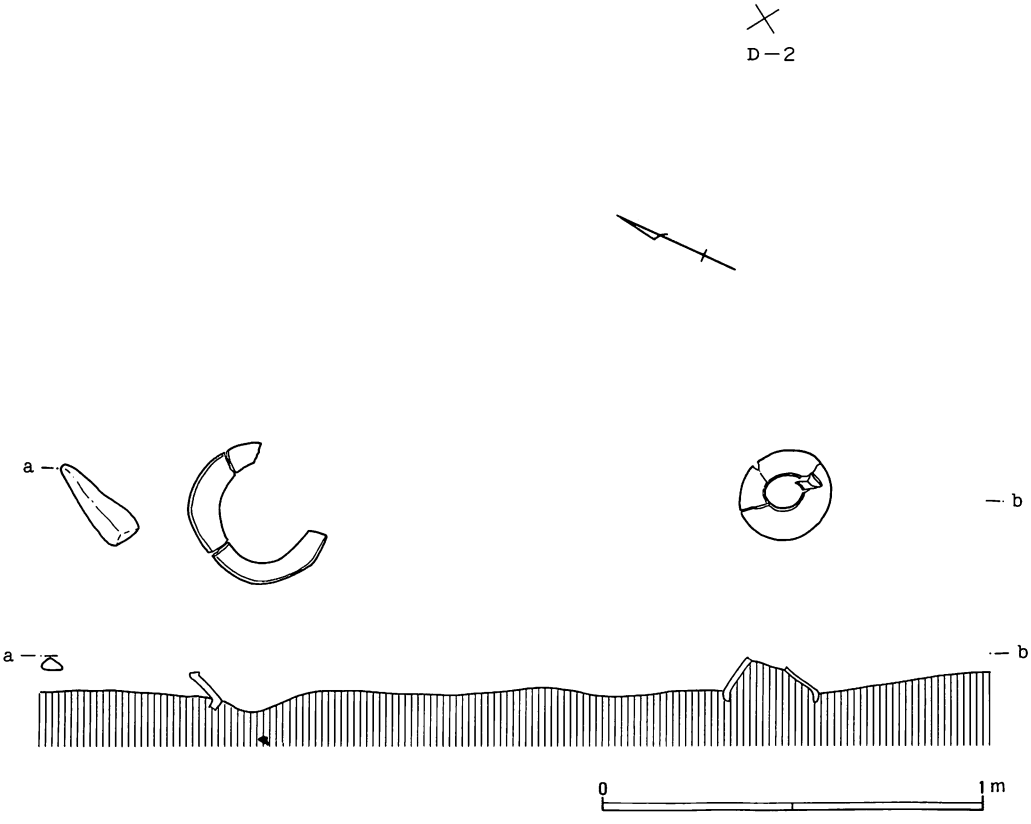
1号住居址

調査区西端のC・D－1～3グリッドに位置する。住居址に関する施設は埋甕炉のみであるが、この付近からは同時期の遺物が密集して検出されていることから、住居址として捉えた。壁、柱穴などは確認できなかった。炉に使用された土器は深鉢の口縁部で（第6図3）、付近から長さ30cm程の細長い礫が出土している。また、炉址から1m50cmほど南では深鉢口縁部が床面に伏せた状態で確認されている（第6図2）。住居址の規模は、遺物の集中から直径8m前後と推定される。

遺　物

①土　器（第6図）

2は、口縁部が「く」字状に屈曲する深鉢で、胴部以下は欠損する。口縁部文様帯には隆帯で「の」字状の文様と区画文が施され、区画帯の内部に刻み目を施す。口縁部径は21.5cm、現存高12cmを測る。3は炉として使用された土器で、頸部屈曲部に隆帯を配する。



第 4 図　1号住居址 炉址

胴部はほとんどが欠損しているが、地文の縄文がわずかに残る。口縁部径35cm、現存高７cmを測る。

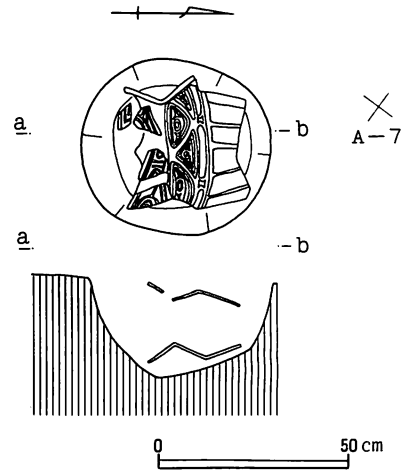
これらの土器の特徴から住居址の時期は、縄文時代中期後葉曽利Ⅱ式に比定される。

②石　器（第12・13図）

石鏃、打製石斧が出土している。

第12図４は、黒曜石製の凹基無茎の石鏃で、長さ２cm、幅1.4cm、重さ0.5ｇを計る。

第13図２は打製石斧の基部で現存する長さ7.8cm、幅4.5cmを測る。第13図５は長さ12.5cm、幅５cm、厚さ1.2cmの打製石斧で、刃部は斜刃である。



第５図　１号土坑

１号土坑

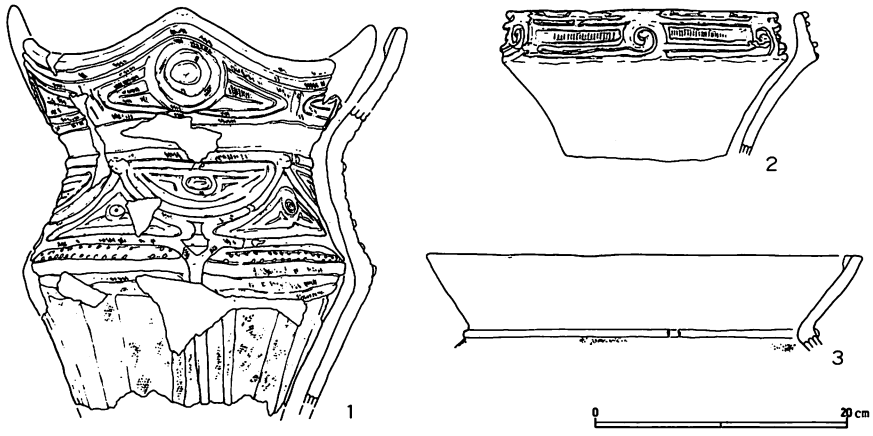
調査区中央のＡ－７杭の南50cm程の地点に位置する。

土坑は長軸50cm、短軸45cmのやや楕円形を呈し、深さ27cmを測る。この土坑内からは深鉢形土器が横位の状態で出土している。

出土土器は頸部がくびれ、胴上部が屈曲する深鉢形土器で、口縁部は４単位の波状口縁である。底部付近が欠損しているため現存高は32cm、口縁部径29cm、最大胴部径25.5cmを測る。

口縁部文様帯には沈線による玉抱三叉文を各波状部に施し、地文にはＬＲ縄文を施す。頸部文様帯を無文で残し、肩部文様帯には隆帯区画による半円形区画文と三角形区画文を交互に配する。この区画の中には沈線による玉抱三叉文を施す。さらに肩部屈曲部からはＹ字形の隆帯が垂下する。胴部には沈線による縦位の区画が描かれ、地文にＬＲ縄文を充填する。

これらの特徴から縄文時代中期初頭の五領ケ台式に比定される。



第６図　１号土坑、１号住居址出土土器
（１－１号土坑、２・３－１号住居址）

縄文時代の遺物

(1) 縄文土器

遺構外から縄文時代前期後葉～中期後葉の土器群が出土している。出土量は、中期後葉のものがもっとも多く、これについで中期前葉の資料がある。

① 前期後葉の土器

本群に比定される土器は出土土器中1点のみである。本資料は波状口縁をもつ深鉢口縁部で口縁下が「く」の字状に屈曲する。文様は半截竹管によって平行沈線が描かれる。縄文時代前期後葉諸磯b式に比定される。

② 中期初頭～前葉の土器

第7図2～7・11～14・17は深鉢形土器。口縁部が肥厚し外反するタイプ（1・3・4）、口縁直下から文様帯をもつタイプ（2）、口縁部がやや外反し無文帯となるタイプ（6）、口縁端部に山形突起を有し頸部がくびれるタイプ（7）など口縁部にもいくつかのバリエーションがある。文様は隆帯、半截竹管による沈線などで表現され、地文に縄文を有するものもある（3・12～14・17）。

第7図8～10は浅鉢形土器。8・9は擂鉢状に開く浅鉢である。外面は無文で、内面口縁部に連続爪形文をめぐらしている。10は口縁下が「く」の字に屈曲するもので、口縁下に文様帯をもつ。

深鉢、浅鉢ともに五領ケ台式に比定される。

第7図15～16は口縁部に隆帯および沈線で楕円区画を施し、区画内を角押文で充填する。口縁部端部には欠損しているが、山形の突起の痕跡が認められる。

中期前葉の狢沢式に比定される。

③ 中期中葉の土器

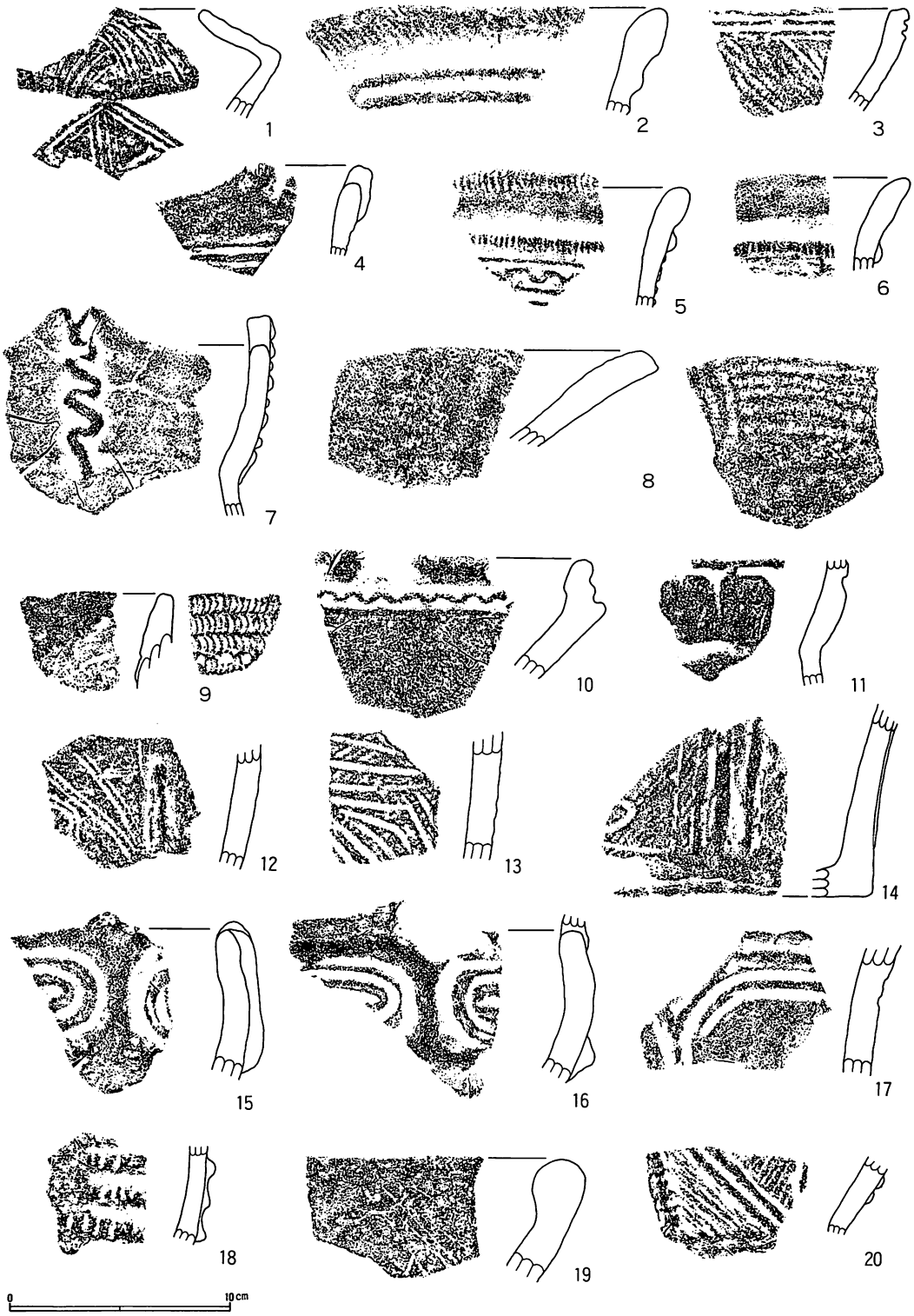
第7図18は、刻みを有する隆帯を平行に配したもので、文様の特徴から井戸尻式に対比されると考えられる。

④ 中期後葉の土器

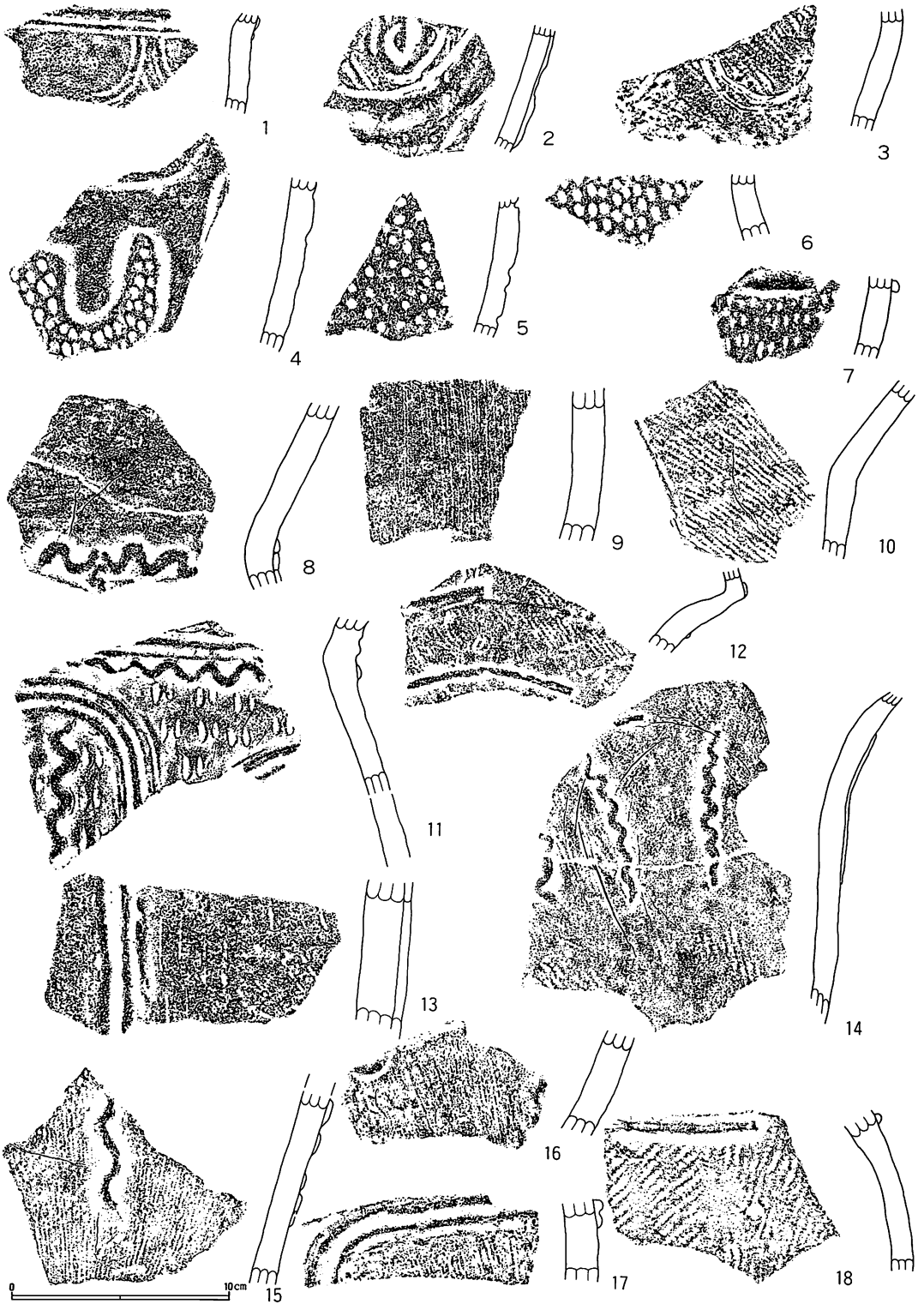
第8図8～18、第9図12～16は、胴部に太い隆帯による懸垂文、U字状文、平行線文を施し、地文に条線、列点文、縄文をもつ。第9図1・2・4・9・10は端部が屈曲し、隆帯や平行沈線などで重弧文を施す口縁部破片である。第9図6・7は、縄文のうえに隆帯による連弧文をほどこす口縁部である。第9図11は頸部が緩やかにくびれる深鉢である。口縁下に「S」字状の隆帯による文様と三角形と円形の沈線文が描かれ、地文に撚糸文をもつ。これらは曽利Ⅱ式に比定される特徴をもつ。

第10図1～12は、口縁部が肥厚し、沈線による「S」字状文や円形文を施すもので、山形突起をもつものも存在する（1・3・4・7）。第10図15～19は沈線による連弧文を特徴とする口縁部で、頸部がゆるやかにくびれる。これらは曽利Ⅲ式に比定される。

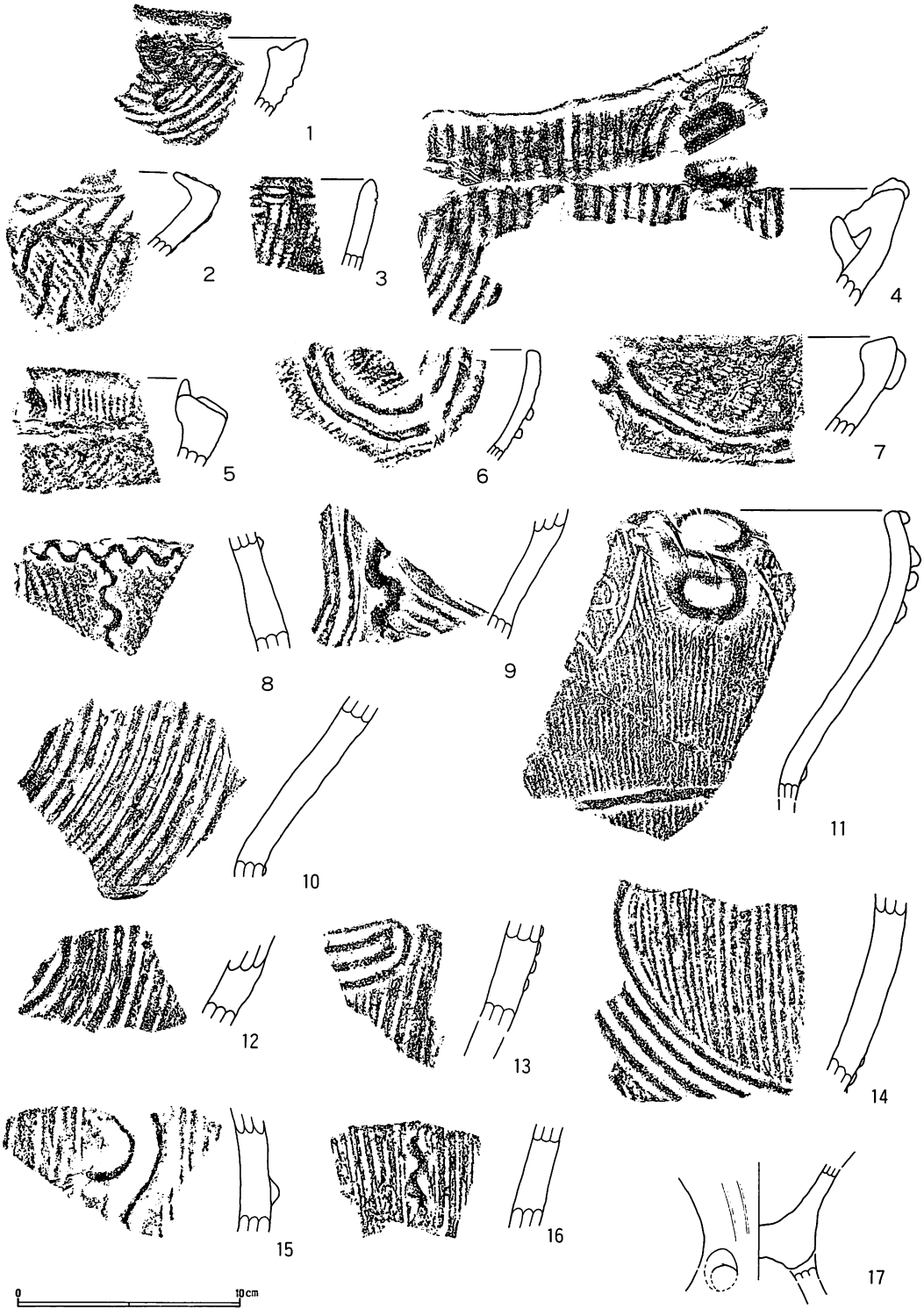
第11図1～21は沈線または低い隆帯による縦長の区画内を綾杉文、懸垂文、「ハ」の字文、列点文などで充填する深鉢で、曽利Ⅳ式に比定される。



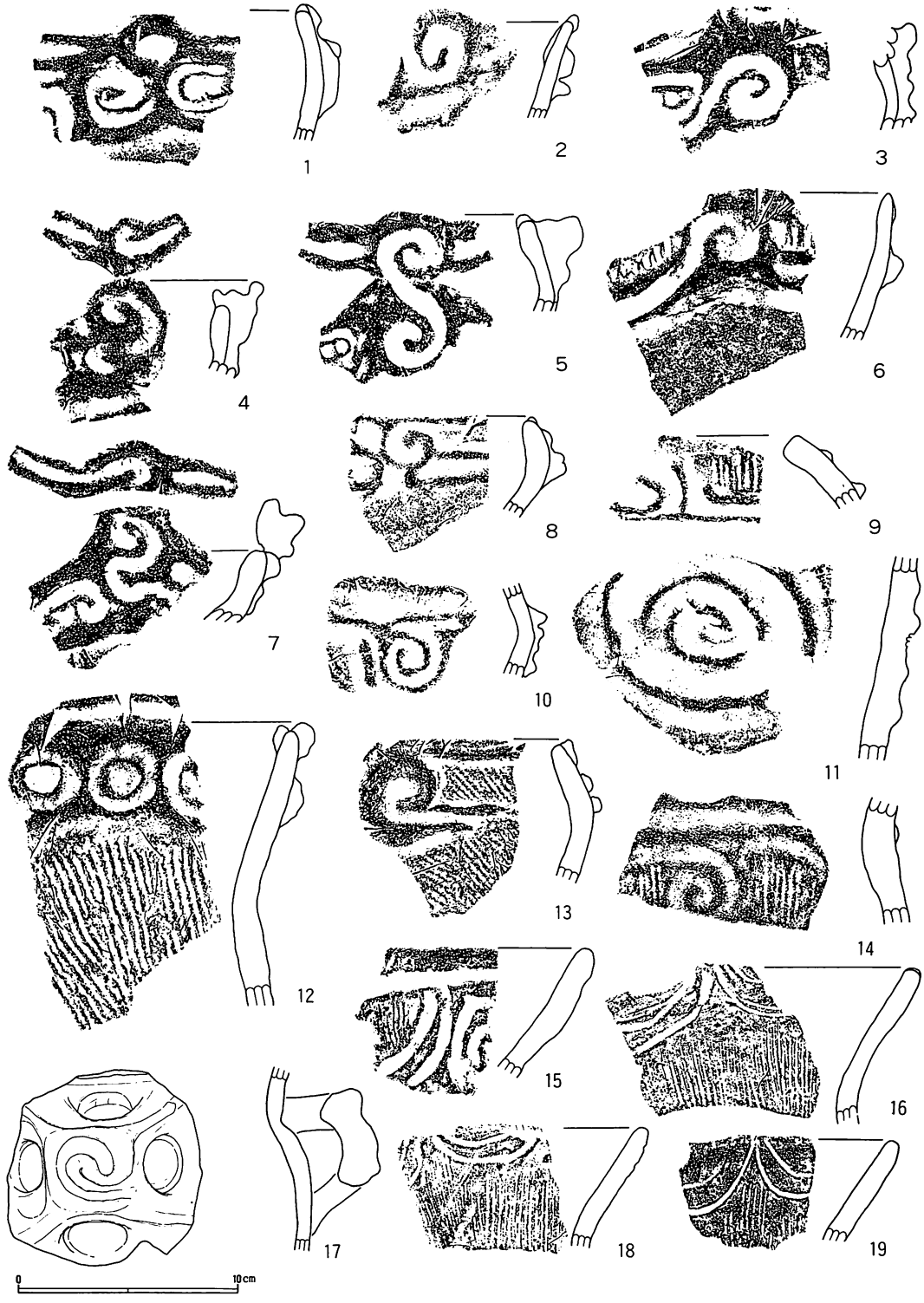
第 7 図　縄文土器 ①



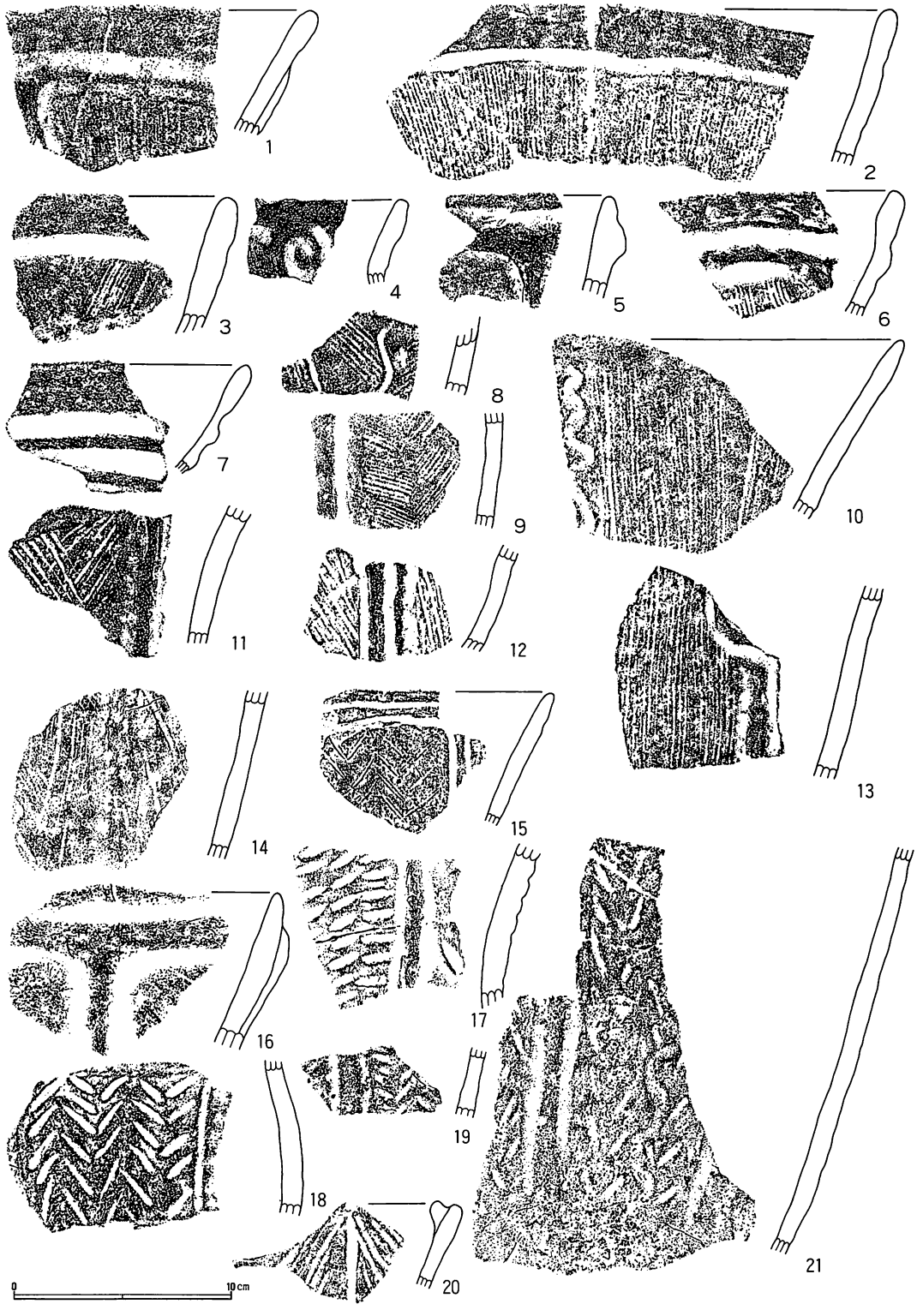
第 8 図　縄文土器 ②



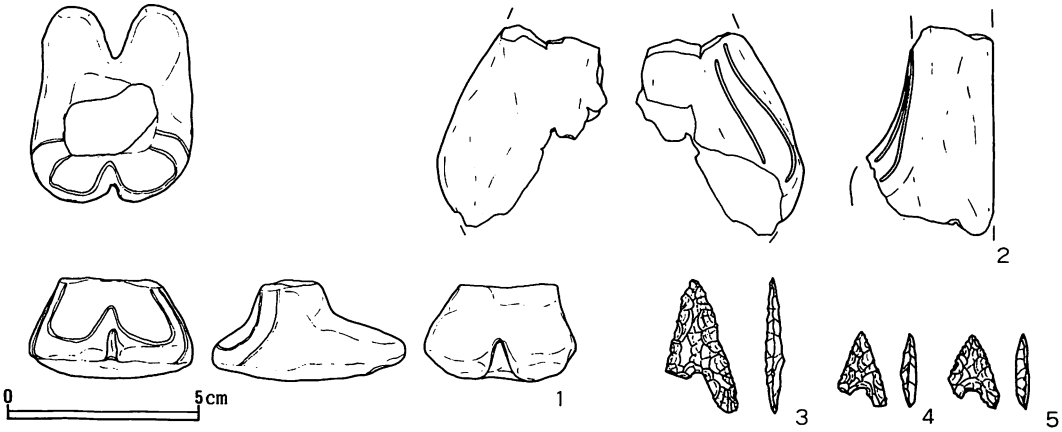
第 9 図　縄文土器 ③



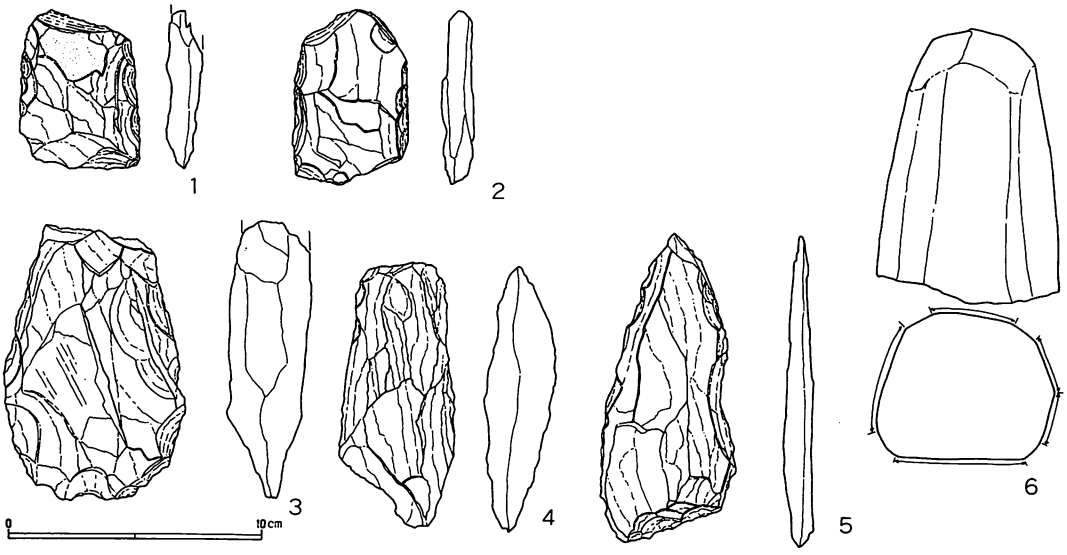
第 10 図　縄文土器 ④



第 11 図　縄文土器 ⑤



第 12 図　土偶・石鏃



第 13 図　打製石斧・磨石

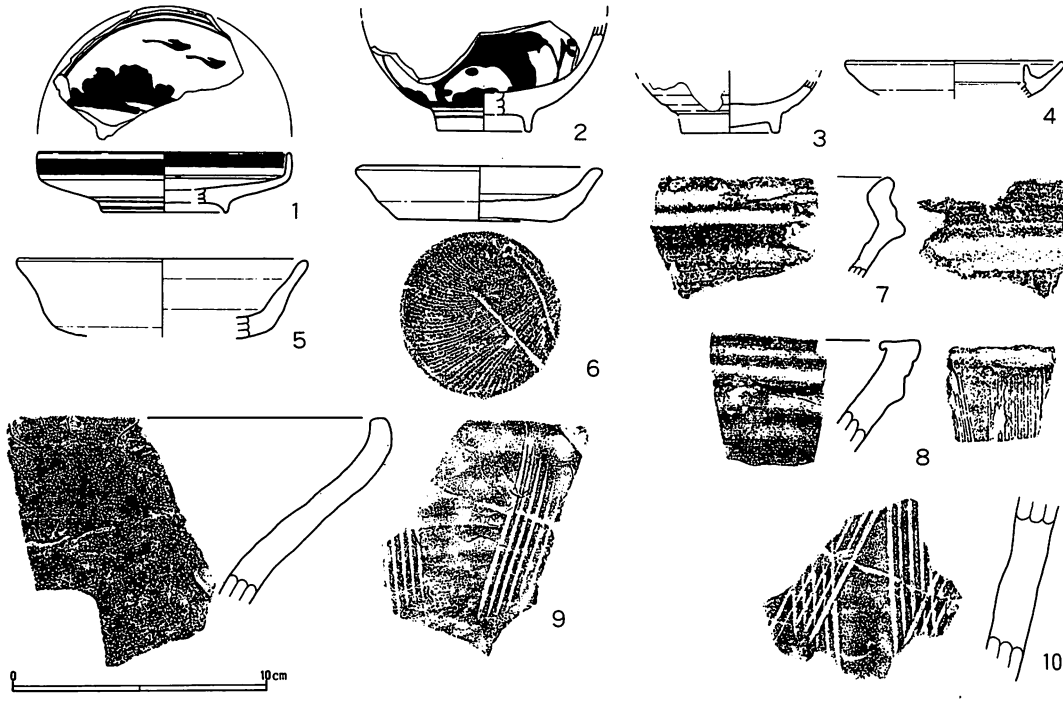
(2)　土　偶（第12図１・２）

１は土偶の臀部から脚部で、背中部分には沈線文が描かれる。２は土偶右腹部で、やはり背面に沈線文が描かれている。

(3)　土　器

①　打製石斧（第13図１・３～５）

第13図１の短冊形を除いて３～５はやや撥形を呈する。刃部は３が円刃、５は斜刃である。



第 14 図　陶磁器・土師質土器・擂鉢

② 石　鏃（第13図３・５）

いづれも脚部が一部破損した凹基無茎鏃である。３は比較的大型で、長さ3.4cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重さ1.5ｇをはかる。黒曜石製。５は長さ1.9cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ0.5ｇをはかる。黒曜石製。

③ 磨　石（第13図６）

周囲に５面の磨り面をもつ磨石である。長軸方向はほぼ半壊しているが、現存長10cm、幅６cm、厚さ５cmをはかる。安山岩製。

中近世の遺物

(1) 土師質土器

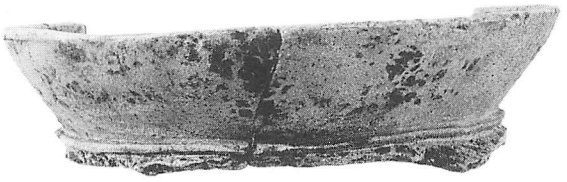
第14図６は、直径9.5cm、高さ2.2cmのロクロ成形による土師質土器で、底部に静止糸切り痕をもつ。

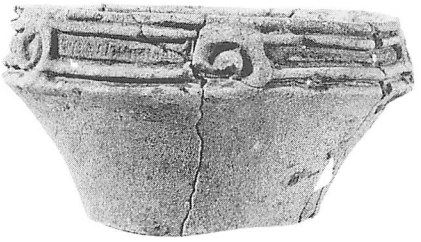
９は、口縁部がやや内反する土師質の擂鉢である。10は、外面に５本単位の平行沈線を格子状に施す土師質土器であるが、器形は鉢形を呈する。

(2) 陶磁器

第14図１・２は染付、７は鉄釉の擂鉢、３はいわゆるオロ茶碗とよばれる施釉陶器である。これらはいづれも18世紀代の所産と考えられる。

写真図版

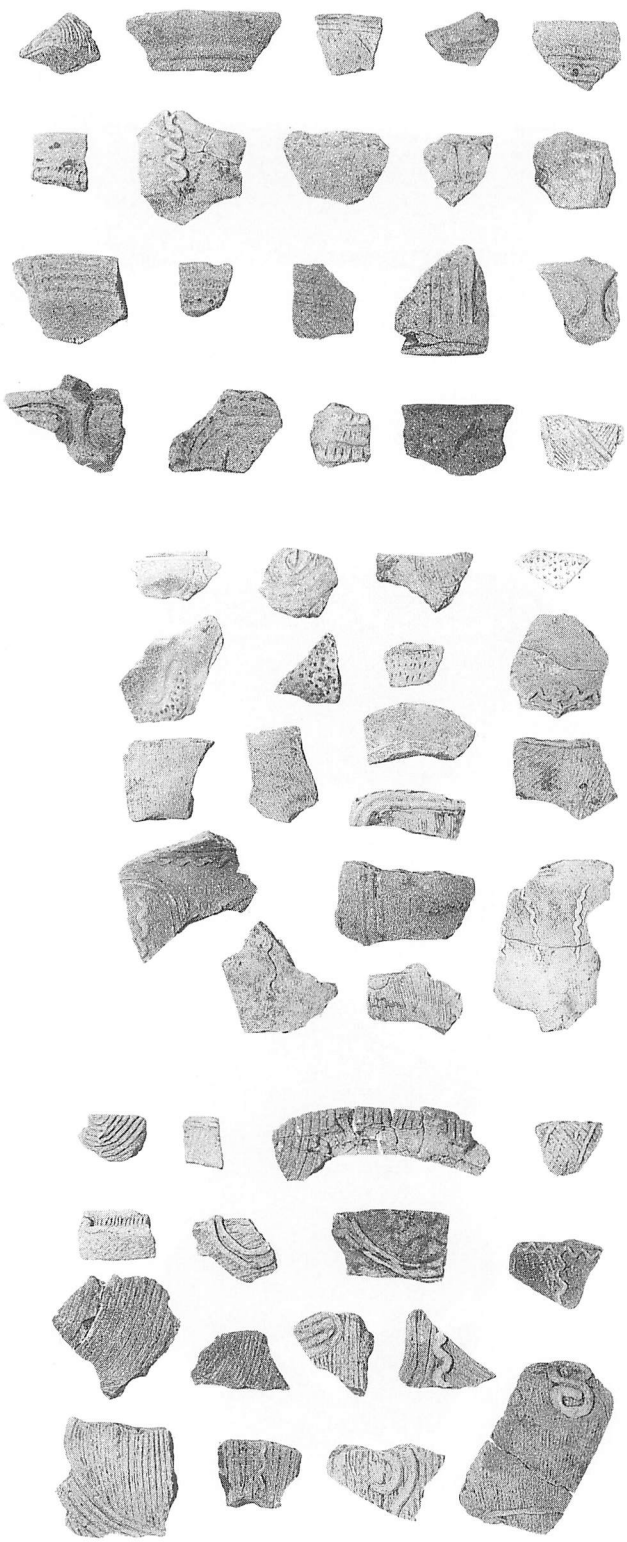




1号住居址出土土器

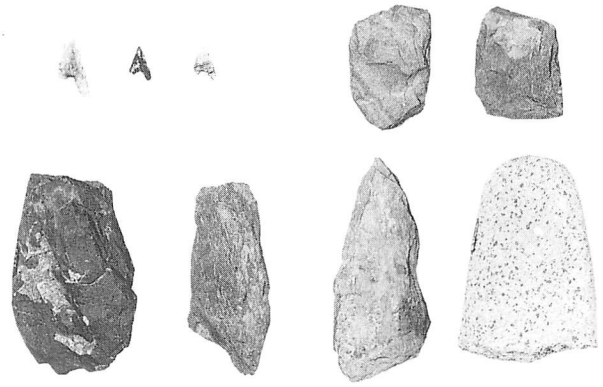
1号土坑出土土器

図版 2

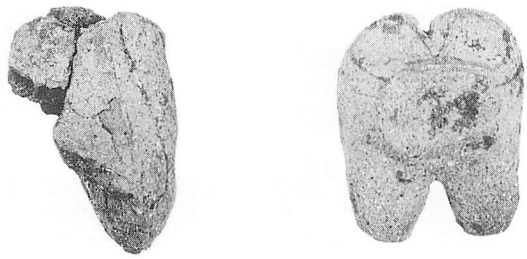


縄文土器

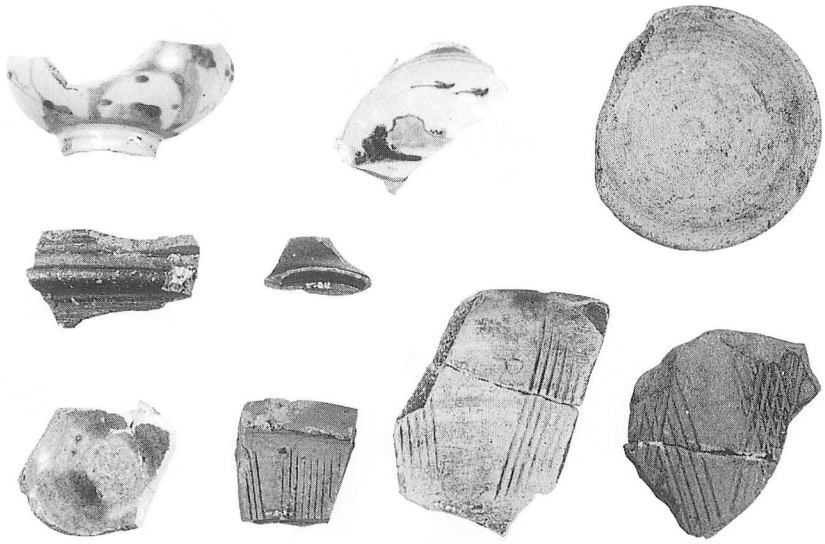
縄 文 土 器



縄文時代 石器



土　偶



中近世の遺物

フリガナ		ゼンコウジ キタイセキ		
書名		善光寺北遺跡		
副題				
シリーズ		山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第69集		
主著者・従業者		中山誠二		
発行者		山梨県教育委員会		
編集機関		山梨県埋蔵文化財センター		
住所・電話		山梨県東八代郡中道町下曽根923　　0552－66－3881		
印刷所		（有）新星堂印刷		
印刷日・発行日		1992年3月20日　1992年3月31日		
フリガナ		所在地		
遺跡		25000分の1地図名・位置	甲府	北緯35°39′50″　東経138°36′
概要	主な時代	縄文時代中期		
	主な遺構	住居跡		
	主な遺物	縄文土器・石器		
	特殊遺構			
	特殊遺物			
	調査期間	約1ケ月		

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第69集

善光寺北遺跡

印刷日　平成4年3月20日
発行日　平成4年3月31日

編集　山梨県埋蔵文化財センター
山梨県東八代郡中道町下曽根923
TEL 0552－66－3881・3016
発行所　山梨県教育委員会
印刷所　（有）新星堂印刷